

ネグモ、サラグモ科の各1種である。これらの両科に属する *Araneus*, *Linyphia* 2属の普通種はいずれも $n=13$ (11A+XX) であるのに対して, *A. venfricosus*, *L. montana* の2種はそれぞれ $n=25$ (23A+XX) 及び24 (22A+XX) で、両者と普通種の通常染色体間にはほぼ倍数的の関係が見られる。本類では特殊の染色体数がある科に制限されている傾向があり、近縁種間の大きな染色体数の変化は極めてすくない。なお今回新に発表された核型は次の6種である(いずれも♂)。

		$2n$	n	X—chrom.
Fam. Dysdevidae	<i>Ariadna laferalis</i>		4 (I)	XO
"	Urofeidae <i>Uroctea compactilis</i>	42	22 (I)	XXO
"	Agelenidae <i>Agelena limbata</i>	46	24 (I), 24, 22 (II)	XXO
	<i>Tegenaria corasides</i>	42	—	—
"	Sparassidae <i>Thelcticopis severa</i>	43	—	—
"	Linyphidae <i>Linyphia montana</i>		24 (I)	XO

稲葉明彦(広島文理・動): 軟体動物の染色体数

軟体動物では約140種(内 Pulmonata 約80種)の染色体が報告されているが再検を要するものがすくない。Prosobranchia, Opisthobranchia では未だ充分これを証明し得ない。単為生殖を行う数種で倍数性が報告されている。Pulmonata では全然倍数性も性染色体も見られない。また *Octopus* にも性染色体らしきものを見なかつた。今回次の種の染色体数を報告するが之で邦産軟体動物について8科10属25種が観察された。

Octopus variabilis (Cephalopoda), *Euhadra periompala*, *E. sadoensis*, *E. senckenbergiana aomoriensis*, *E. s. minoensis* 以上 $n=28♂$; *E. eoa*, *E. s. notoansis* 以上 $2n=56♂$; *E. guaesita*, *E. montium* 以上 $n=29♂$; *E. scaevola* $2n=58♂$, $2n=29♂$; *Cipangopaludina malleatus* (Prosobranchia) $2n=18♂$, $n=9♂$; 以上11種, すべて性染色体を認めていない。

鈴木清(大阪市立医・解剖): 朝鮮産スツボン(*Amyda Maackii Brandt*)の染色体

朝鮮産スツボンの成体の睾丸及び幼弱な精巢を材料として次の結果を得た。(1) 雄の染色体は Diploid の場合には、大きなV型2対, J型2対, 桿状のもの10対, 点状のもの18対, 総計64個を数えることができた。すなわち核型は $4V+4J+20R+36D$ で、雄は Homozygot である。(2) 第一造精細胞には常に32個の Tetrad を見る。そのうち3個は美しい Compound ring を作っている。(3) 第二造精細胞には32の Diad を含んだもののみが観察された。(4) 原卵細胞にはJ型2対中小形のもの1個不足した63個の染色体が観察される。またその成長期の核内にはJ型の染色体1個が異常凝縮を行うのがある。(5) 以上の結果からスツボンは Diploid で $♂64$, $♀63$ 個の染色体を有し、第四位の大きさのJ型のものがZ染色体と考えられ、W染色体の存在は認められなかつた。

野草俊作(大阪市立医・解剖): スツボン卵に見られる異常凝縮について

スツボン (*Amyda japonica*) 第一卵母細胞の細長期の終に近づくとき染色性の弱い性染色体が核膜に沿ってヘテマ状に現われてくる。接合期には次第に太くなり染色性も増す。合体期の初期に入ると染色体は一段